

序

『アレルギー疾患の免疫機構』（中西憲司，山本一彦／編）が実験医学増刊号として刊行されて4年が経つ、いや、まだ4年しか経っていないというのが正しかろう。なぜこの短期間で改めてアレルギー領域の増刊号が必要となったのかを考えてみたい。

アレルギー学の歴史を振り返ってみると、1913年にリシェがアナフィラキシーの研究でノーベル賞を受賞された。その後、1966年に石坂公成・照子御夫妻がIgEを発見され、1980年代には、アレルギー学はある種の黄金期を迎えた。石坂博士の著書『我々の歩いて来た道—ある免疫学者の回想』には、「昭和27年に東京の国立公衆衛生院で開催された第一回日本アレルギー学会が、おそらく基礎と臨床の先生方が一堂に会した日本で最初の学会ではなかったかと思う」と記されている。すなわち、アレルギー学は基礎と臨床をつなぐ最初の貴重な学術領域であった。

しかしながら、1990年からの約20年間は、アレルギーはTh2細胞/IgEという単純な図式で片付けられていた。そのため基礎研究者はアレルギー研究から離れていき、アレルギー学は、単なる臨床的学問と見なされていたように思う。

ところが、この数年間で、アレルギー学は再び学問として飛躍的に発展した。ポストゲノム・システムバイオロジー・ライブイメージング・オミクス解析・GWAS研究などの先端技術を取り込み、今やさまざまなアレルギー疾患が分子レベルで語られる。また、アレルギー学の魅力はヒトの疾患と直結しているところにもある。マウスからヒトへのパラダイムシフト、さまざまなアレルギー疾患の臓器を越えたクロストーク、そして小児から成人へと時間とともに進展するアレルギーマーチの概念など、細胞・臓器・時空間を越えたダイナミックな現象がアレルギーという観点から見て取れる。そして、基礎研究の知見をもとに、分子標的治療が次々とアレルギー疾患に応用されてきている。それに呼応するかのように、アレルギー学を取り扱う英文雑誌の引用回数も右肩上がりである。

以上のように、この4年間におけるアレルギー学の発展はめざましいものがある。ぜひこの素晴らしいアレルギー学の発展を読者の方に楽しんでいただきたいと思って、わずか4年の歳月の後に改めて増刊号を発刊する運びとなった。本書では、①アレルギーの基礎メカニズム、②免疫細胞・基盤分子の最新トピック、③アレルギー疾患研究、④新技術の応用、⑤臨床応用、の5つに章立てした。いずれも第一線で活躍する国内外の研究者に最新の知見をまとめていただき、今後のアレルギー研究を展望する「新しい」企画となるよう心がけた。そのため、既存のアレルギーの教科書とは異なる大胆ともいえる話題も盛り込ませていただいた。すでに教科書に記載されているトピックは大切であると理解しながらあえて外したものもある。執筆陣の方には無理なお願いをしてしまったが、お忙しいなか快く執筆を承諾してくださった先生方に改めてお礼を申し上げたい。最後に、羊土社の尾形佳靖様には大変お世話になった。彼の助言なしにはこの企画はなしえなかったと思われる。ここに深く感謝したい。

2013年9月

椛島健治